全国患者図書サービス連絡会会報

VOL.5 NO.1
(通巻 No.13)
1998.5.

目　　次

巻頭言
お大事に　栃木県がんセンター所長　小山 靖夫　1

第５回総会報告
〔第１部〕
総会議事報告　3

〔第２部〕
講演
看護学生による患者図書サービスの歩み
浦安市川市民病院附属葛南看護専門学校　柏 明美　9

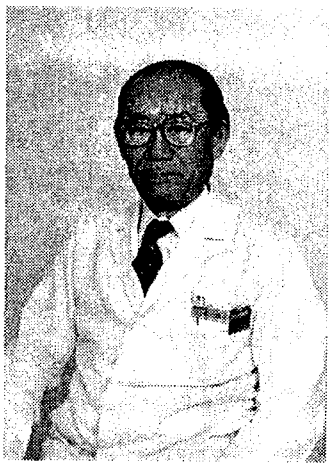
報告
１．国立がんセンター中央病院における患者図書サービス
国立がんセンター中央病院図書サービスボランティア　高橋 あかね　12

２．小児病棟ベッドサイドでの読み聞かせ
東邦大学医学部附属大森病院「ぐりぐら会」　秋成 靖　15

ブックレビュー　14
会員名簿　19
投稿規定　裏表紙

「お大事に」

栃木県立がんセンター所長
会長　小山靖夫



患者さんを見舞っての帰り、「それではお大事に」、などといって病室を出るのはごく普通である。病床にある人には勿論、健康を損ねている人一般に接する場合にも、穏やかな感触のあるこの挨拶言葉を私も愛用している。

ところが“そうではない”というご意見があって、少々戸惑ってしまった。4月12日（日曜日）朝、NHK教育TV；こころの時代“穏やかな死”、に出演された中村仁一氏（高尾病院理事長）によると、癌末期の患者さんに向かって「お大事に」というのは、自分は安全なこちら（此岸）にいて、あちら（彼岸）に向かう人に哀れみを持って投げかける言葉ではないか？　“死ぬのはあの人で自分ではない”、“相手は病者、自分は達者”の優越感・傲慢さ（表現は違ったかもしれない）が、「お大事に」と言わせているのではないかと思われる。

私は週1回の回診日、全入院患者さんをお見舞して声を掛ける。「今日は」に始まって、二言三言の会話、最後は何と言って別れるか？　この挨拶が自然に出て来て、患者さんがいい気分になり、私もそれにあやかって気持ち良く次の患者さんに向かう事が出来るのが最高である。しかし、いつもそんなにうまく行くわけではない。手術の日取りが決まって、不安と根治への希望がない混じり、精神が昂揚している患者さんには、「がんばりましょうね！」という言葉は、“貴方と一緒に私達も一生懸命がんばりますよ！”という気持ちの交流を呼び、率直な励ましになるだろう。しかし、厳しい副作用や、術後の合併症など、長く続く辛い症状を耐えながら、希望の明かりを大きくしようと懸命の患者さんに、「がんばりましょう」と声を掛けても“いわれなくてももう充分がんばっているよ‥‥”とか、“ただ「がんばれ」といわれても、何をどうがんばるのだ‥‥”など、というようなことになりかねない。

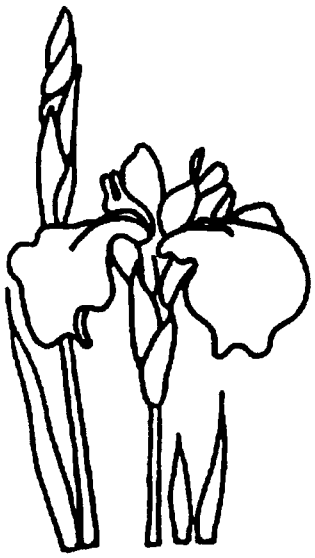
それでは、どう言えば良いか？　いろいろ考えるが、そんなにうまい言葉は出てこないものだ。何かの一言が良い方にも悪い方にも重大な転機となる例はあることなので、難しい。

こういう場合は何よりも、相手の苦痛（肉体的、精神的）を自分がどこまで共感できているかにかかっている。言葉の他に物腰・態度・仕種すべてが患者との対話になる。そして言葉としては「お大事に」、「お大事になさって下さい」などとなる事が私の場合は多いのである。

なにか良い兆候があれば「あー、それは良かったですね、どうぞお大事に」、「大成功！あともお大事にね」。退院が決まった患者さんに「おめでとうございます、帰られてからもどうぞお大事に」、「お気を付けて」などと、どうも「お大事に」の出番が多くなる。

前記中村氏のお話の対象は題名からも解るように、癌の“いわゆる末期”にある患者さんたちである。患者さんや家族の集まりが終わり、帰りの挨拶を交わす時、中村氏は「またお会いしましょう」と言われるのだそうである。“次に会うのは１週間先か、１ヶ月先か解らないが、また、実際には会う機会は無いかも知れないが、とにかく私はそうありたいと思っています”という気持を、「またお会いしましょう」という言葉に託される。なるほど、なるほど。

私が声を掛ける患者さん達は様々な病状にあり、末期癌の方ばかりではない。中村氏も、どんな場合も「お大事に」が良くないといっておられるのではないと思われる。もともと、相手の事を気遣い、“体をいたわり、大切にして下さい”という意味を込めた挨拶言葉である。このような言葉は歴史的、習慣的に社会に馴染んでいるところがあり、今後も使わせて頂きたいと思っている。



「全国患者図書サービス連絡会」
第５回総会報告

日時：平成10年2月14日（土）13:30-16:30
場所：文京シビックセンター５階研修室（東京）

〈第１部　総会〉13：30～14：20

開会

会長挨拶

議長選出

議案１．平成９年度活動報告

議案２．平成９年度会計報告

議案３．平成１０年度活動計画

議案４．平成１０年度予算計画

議案５．会費の値上げについて（2,000円⇒3,000円）

議案６．「患者サービス・ガイドブック」（仮題）の作成進行状況

議案７．役員改選

議案８．その他

〈休　憩〉14：20～14：30

〈第２部　講演・事例報告会〉14：30～16：30

１．講演：「看護学生による患者図書サービスの歩み」

浦安市川市民病院付属葛南看護専門学校　　柏　明美氏

２．事例報告

１）「国立がんセンターにおける患者図書サービス」

国立がんセンター中央病院図書サービスボランティア
高橋あかね氏

２）「小児病棟ベッドサイドでの読み聞かせ」

東邦大学医学部附属大森病院「ぐりぐら会」
大田区蒲田西特別出張所　　秋成　靖氏
東京医科歯科大学図書館　　石井保志氏

閉　会　　16：20～16：30

[議案１]

平成９年度活動報告

本報告は、前回総会において活動計画として提案され、総会において承認された項目に沿って、１年間の活動をまとめたものである。

１．会報の内容を充実させ、会員間の情報交換と活動に役立たせる

本年度の会報は、第４巻１～４号を1997年４月、７月、10月、1998年２月の４回発行した。巻頭言の小山会長のエッセイは多くの会員から期待され、本年も３回掲載できた。第３号では病院患者サービスの先駆者である及川道代氏（明窓社刊「患者と図書館」の発行者）を紹介する特集記事を企画した。また第83回全国図書館大会での分散会「入院患者への図書サービス」の参加者へも会のＰＲとして会報を配付した。活動報告として各号に２～３事例を必ず掲載し、会員間での情報交換の一端を果たすものとした。その他、見学記、本の紹介など幅ひろく会報の内容を充実させた。

２．会員の活動状況を広めるために、会報購読者を募る

第３回総会において正会員のほかに会報の講読会員を設けて購読者を募ったが全員が正会員として入会した。

３．新しく患者図書サービスを開始する病院またはグループのコンサルテーション的役割を持つ

事務局経由や、各会員への問い合わせや相談には積極的に応えている。とくに最近では病院内に患者図書室を設置する動きがあり、それに参加するボランティアや本の収集、消毒の問題など幅広い。各会員のサービスの事例を紹介しながらその役割も軌道にのりつつある。

４．会員の拡大

本会の総会をはじめ、本年は全国図書館大会（山梨）および日本病院会全国図書研究会（新潟）において患者図書サービスをテーマとしてのシンポジュウムが企画され、それに参加された方からの入会が多かった。本年度は新たに団体会員１、個人会員８名の９会員の参加が得られた。1998年２月14日現在の正会員数は団体２０、個人２３、購読会員１の４４会員である。なお平成10年度からの正会員の入会２名も受け付けている。

５．研究、開発の活動を進めるプロジェクトについて検討

前年度の役員会にて当面は「患者図書サービス・マニュアル」（仮題）を編集発行するプロジェクトを組織することが決まり、総会においても承認された。それに基づき本年度はプロジェクトを組織する準備段階として、役員会にて内容の骨組みの検討を行った。それを土台として本総会において検討を重ねて組織化を計りたい。また医学・医療に関わる会員からの関心が高まりつつある「患者さんに対する医学・健康情報の提供」についてのプロジェクトの発足にも希望が寄せられている。

６．平成９年度に行われた全国図書館大会（山梨大会）への参加

1997年10月29～31日に甲府市で開催された山梨大会の第２日目の第８分科会第２分散会「入院患者への図書サービス」の準備段階から前会長の岡部幹事と地元の病院図書館研究グループが参加された。会場では連絡会のＰＲのためのチラシと会報第３号を出席者へ配付した。また第２分散会でのシンポジウムには、当会より４名が司会とシンポジストとして参加した。今後とも、このような大会にも関連をもって活動していきたい。

［議案２］

平成９年度決算報告

＜収入＞

内　　容	金　　額
前年度繰越金	21,924
会　　費　（@2,000×44）	88,000
会報販売　（@500×11）	5,500
利息	44
計	115,468

＜支出＞

内　　容	金　　額
会報	
印刷代　（@163×4×80）	52,160
送　料　（@270×4×43）	46,440
総会	
会場借用料	6,000
開催通知送料（@80×44）	3,520
出欠用ハガキ（@50×40）	2,000
事務局費	9,575
	119,695
	△4,227

＜会計監査報告＞

１．期　　日：平成１０年２月３日（火）
２．場　　所：自治医科大学図書館
３．監査報告：
平成９年度経理執行について、金銭出納簿、各帳票類及び預金通帳との照合の結果、いずれも正確であり、活動計画に沿って適正に執行されていることを認めます。なお、極力努力した結果であることは理解できましたが、収入の増加を図る必要があると考えます。

監　事
東海陽子

［議案３］

平成10年度活動計画

１．会報の発行（年４回）とその内容の充実

会報は会員間の情報交換と会の活動の基礎となるものである。総論･時論なども掲載してその内容をよりゆたかにして充実させる。

２．新しく患者図書サービスや患者図書室の設置の企画、実施をするグループまたは病院のコンサルテーションとしての役割をもつ

最近新しい患者図書サービスの開始や病院内に患者図書室設置の動きが多くなり、コンサルテーションとしての役割の必要性が再認識されるようになった。そのことが会員の増加ともなり、また会員の事例を紹介することにより会員間の情報交換も活発となっている。

３．会員・購読会員の拡大

患者図書サービスの意義と必要性を広く理解してもらうＰＲを行いながら会員の拡大を行う。また年々内容が充実されている会報を多くの人々にも薦め、購読会員を増やす。

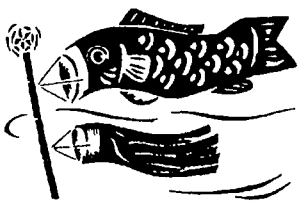
４．研究と開発をすすめるプロジェクトの活動

平成８年度からの継続事業として進めてきた「患者図書サービス･マニュアル」（仮題）を継続してプロジェクトの組織化を実施する。あわせて「患者への医学医療情報の提供」や「本の消毒」など会員から関心が寄せられているテーマについても取り組みたい。

５．会の活動および患者図書サービスを拡めるための公報活動

これまでは会の内部の充実を第一として活動してきたが、今後は図書館界をはじめ病院関係機関に対しての公報活動も行う。時代に即した方法としてホームページによる会報の内容の紹介、開催行事のＰＲなども考えたい。

また図書館大会にも関わりを持ち、日本図書館協会の図書館年鑑や雑誌中でＰＲを行う。



［議案４］

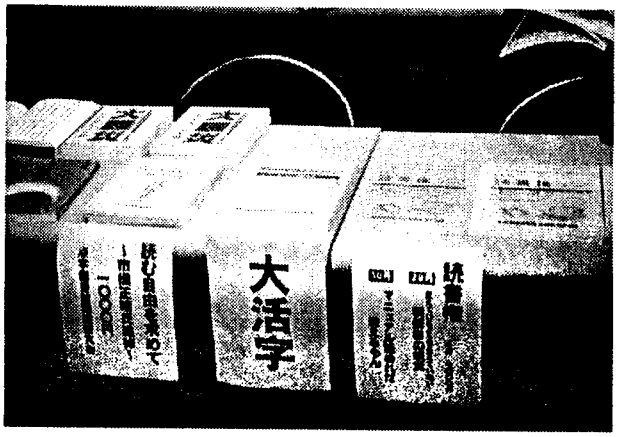
平成10年度予算計画

〈収入の部〉

内　容		金　額
会費	(@ 3,000 × 45)	１３５，０００
会報販売	(@ 500 × 20)	１０，０００
計		１４５，０００

＜支出の部＞

内　容		金　額
会報		
印刷代	(@ 163 × 4 × 60)	３９，１２０
送料	(@ 160 × 4 × 60)	３８，４００
トナー	(@ 25,000)	２５，０００
総会		
会場借用料		６，０００
開催通知送料	(@ 80 × 45)	３，０００
出欠用ハガキ	(@ 50 × 45)	２，２５０
事務局費		３１，２３０
計		１４５，０００



総会当日、会場では「大活字本」の展示も行われた

［議案５］

会費の値上げについて

平成９年度の会計報告の通り、前年度からの繰越金があったにも拘らず、赤字決算となり会計監査からも会費の値上げの必要性が報告されている。

従って、平成10年度の会費および開始購読料を原稿の2,000円より3,000円に値上げすることが承認された。

［議案６］

「患者サービス･ガイドブック」（仮題）の作成進行状況

「患者サービス･ガイドブック」（仮題）の現在の作成進行状況について説明、内容を大きく７項目に分け、各項目ごとに中項目、小項目を設けることになった。

今後更に、「マニュアル作成プロジェクト･チーム」において検討を重ね、詳しくは会誌で報告する。

［議案７］

役員改選

会 長

小山　靖夫	栃木県立がんセンター

役 員

石井　保志	東海大学医学部附属大森病院「ぐりぐら会」
岡部　禹雄	病院図書館研究グループ
小林　順子	浦安市立中央図書館
嶋　大二郎	市立砺波総合病院「オアシス文庫」
滝沢鷹太郎	開業医
奈良岡　功	自治医科大学図書館「日本図書館研究会」
山室真知子	京都南病院

[講演]

看護学生による患者図書サービスの歩み

浦安市川市民病院附属葛南看護専門学校
柏 明美

はじめに

浦安市川市民病院附属葛南看護専門学校は、昭和50年に開設されてから、今年で24回生を迎えることになりました。私も、卒業生の1人です。

浦安市川市民病院は、地域に根ざした医療を目指す340床の公立病院で、当校の多くの卒業生が勤務しております。

さて、当校では、浦安市立図書館と共同で、ベッドサイドでの図書貸出サービスをはじめて5年になります。年間2000冊を越える貸出があり多くの患者さんに利用して頂いております。

このような活動が可能になった背景として、昭和61年から当校の看護学生によって始められたベッドサイドでの巡回図書貸出サービスがあります。今回は、この活動の歩みについて紹介させて頂き、今後の方向性について若干の私見を述べさせて頂きます。

1．看護学生による巡回図書貸出サービスが始められるまでの経過

昭和58年、7回生実習中のカンファレンスで、2人の患者さんの事例についてとりあげられました。A氏は、本が好きだが経済的事情で本が買えず家族はなく身近に知り合いもない。B氏は、病院には余暇を楽しむ場所がない、売店の本は種類が少なく買ってもすぐ読んでしまうしお金もかかる、図書館があればいいのにということでした。私たちの本棚には多くの本が眠っているのに個人的に貸し出すことはできない、そうであれば、移動図書館のようなものが学生の手で運営できないかということに話が発展していき、学生会全体で賛同を得、7名の有志が準備に当たることになりました。本の収集は、学生・教員・病棟職員などから協力を得て約400冊を無料で提供してもらい、さらに、本の消毒の問題やその購入や管理、本の返却方法、メンバー編成、本の選書などについて学生会、看護部と検討を重ね、ようやく3年後、第1回の活動を実施することになりました。

第1回活動

運　　営　：病棟図書委員会（各学年数名づつ）
本の種類　：医学書（専門書）・雑誌・週刊誌・月刊誌・マンガ本は除く図書
巡回期間　：昭和61年10月13日～12月12日迄
巡回方法　：月曜日から金曜日まで17:00から17:30　1日1～2フロアづつ全病棟を
　　1週間で順に巡回 本はワゴンに積み各病室を巡回し談話室で時間まで待機
貸出方法　：貸出簿（ノート）に記入　返却日をカードに記載して患者に渡す
返却方法　：返却ポスト　または　次回巡回時に学生に返却

消毒方法　：エフゲンで消毒

メンバー編成：１年生～３年生で５人１組となる　このうち１人は病棟図書委員が入る

延べ貸出数　：　439冊

この時､利用者の１人から看護部宛に感謝の便りが寄せられ委員はそれに励まされ検討が加えられていきました。その後、年に１回この時期に２カ月間活動が行われ平成４年に、浦安図書館の協力を得るようになるまで、全６回の活動が行われました。

２．現在の活動状況

運　営　　：病棟図書委員（各学年３～４名づつ計12名　３年間同じメンバーが担当）

＊図書館との連絡調整　企画運営全般を行う

学生の参加度：全員参加　１・２年生主体 年間１人あたりの活動回数は２～３回

活動日　　：毎週水曜日　15:45 ～ 17:00

巡回方法　　：学生４名と図書館員４名が２名づつ組んで２チームとなり､ブックトラックで各々２つのフロアづつ４フロアを巡回

巡回時の役割：学生－病棟婦長と巡回時調整（入室禁止の病室の確認、他注意事項など）

患者さんに直接対応（学生は実習着に着替えて活動）

図書館員－貸出手続き（バーコード処理）

返却方法　　：各フロアに返却ポスト設置 巡回時に回収

学校での本の消毒及び管理：

ブックトラックは学校倉庫にて保管　(病院内のスペースを確保できないため仮の対処)　本の整理・入れ替えは図書館員が担当し定期的に実施

消毒はエフゲン消毒　学生が担当 消毒後の本の片付けと整理も行う

貸出数　　：平成８年度　年間2171　月平均181（カセットテープ含む）

ＰＲの方法　：活動日を学生の手作りポスターで毎月各フロアに掲示する

＊昨年より入院時に患者に手渡される入院案内で活動を紹介

そのほか常駐図書貸出：産婦人科病棟のみ実施

３．続けられてきた背景

・患者さんに楽しみに待たれている実感をほぼ全員の学生が一致して感じている

・患者さんに活動を支持され学生が励まされていること

・学生が、患者さんと接すること、知り合えることに意味を感じていること

・先輩から引き継がれているという強制力

・病棟の理解と学生への教育的配慮

図書館の協力を得てから

・学生の時間的負担、貸出時の作業の負担が非常に少なくなっていること

・地方紙などにとりあげられて励みになっていること

4．問題点

1）スペースの確保－ブックトラックや図書を保管･整理する専用の部屋がない

2）選書

自由に選択し読みたいものが読める状況を作っておくことが大切だと思います。注意する必要があるのは、医学的な情報が書かれたものだと思います。最近では、専門書ではなく一般向けに書かれている本も多くなり、いろいろな立場や経験から書かれているので、その内容が、全ての人に当てはまるわけではないということです。いろいろな側面からの情報が得られるよう配慮が必要だと思います。

看護婦も、患者さんに必要な情報提供ができるようにと考えていますので、気軽に相談して頂きたいと思います。

5．今後の活動の方向性

1）図書をベッドサイドへ　と 患者を図書室（スペース）へ

自分で病室からでてこられない人のために、図書の貸出サービスをベッドサイドで、という取り組みで行ってきました。しかし、ここはいろいろな疾患と状況を抱ている人のプライベートな生活スペースでもあります。また、看護の立場からみると、病状が安定しているにも関わらず生活が病室内に限られている患者さんに対しては、できるだけ病室の外に連れだして、生活空間を広げ変化をもてるようにしたいと考えています。病室へという活動の流れもありますが、患者さんを連れ出すという流れも作っていければと思います。場所を変えて、安らげる空間があり、そこに図書があることは大変意味があると思います。

また、患者さんが、本を見てみようかと思ったときに、その場で行動できることも大切です。決められた時間に決められた場所に何人もの患者さんを連れだしていこうとなるとスタッフの負担感も大きく感じられてしまいます。しかし、個々の患者さんへは、その時々の状況に応じてできるだけ安らげるような対応を考えています。図書のある安らぎのスペースが活用できれば、看護婦も積極的に活用を考えます。そのためには、いつでも図書があってそのスペースを使えることも必要になってきます。このようなスペースを、あるいは誰もが使える場を確保できるとよいと思います。

2）学生の意識を高める

これまでは、活動をとにかく軌道に乗せ維持して行くことに注意が集まっていました。

今後は、学生と共に、活動内容の評価をしながら、患者さんへの接し方や配慮の仕方、活動の意味やボランティアの意味などについて検討していきたいと思っています。将来病棟のスタッフとして図書の患者サービス活動を積極的に応援してくれるようになればと願っています。

これからも、入院生活に少しでも安らぎと潤いがもてるように、そしてそれが回復の手助けとなれるような活動を目指していきたいと考えています。最後になりましたが、このような機会を与えて下さいましてありがとうございました。

［報告１］

がんセンター中央病院における図書貸し出しサービス

国立がんセンター中央病院図書サービスボランティア
高橋 あかね

国立がんセンター中央病院で図書の貸し出しサービスがボランティア活動の一環としてはじまったのは1985年の5月でした。移動式の貸し出しで、本をワゴンに積み、病棟を巡回して患者さんに図書の貸し出しをしています。

最初は蔵書の数もごくわずかで本を積むワゴンも１台だけでしたが、現在は寄付をしていただいた本を中核とする蔵書の数は約６０００冊となり、ワゴンの数も小児病棟用の絵本のワゴンも含めると３台に増えました。

蔵書はボランティアの人達が司書の方に教えて頂いた登録方法で登録整理しています。ジャンル別に分類整理して貸し出し用のカードも添付しています。カードには貸し出しの際に氏名と病室番号を記入します。本の内容は小説、随筆、写真集、漫画、ミステリー、絵本など多岐にわたっていて、医学書、宗教の本なども評価のさだまったもので、独断と偏見に満ちていないものに限るという条件ではありますが、保有しています。これらの本を大・中・小三台のワゴンに積んで病棟を巡回しています。大きなワゴンには小説、随筆、画集等を約３００冊、中くらいのワゴンにはミステリーと漫画を約２００冊、小さなワゴンには絵本を約１５０冊積んで巡回しています。

病棟は１０階から３階まであり、一日ではまわりきれないので、水曜・木曜の２回に分けてボランティアが病棟を巡回出来るようにプログラムを作り、週２回の巡回を実施しています。ボランティアの人数は水曜・木曜の両方をあわせると約１４名で、原則として一週間に一回貸し出しサービスに携わることになっていますが、毎週参加できない人以外はボランティア活動をお断わりするようなことはせず、仕事その他の都合で月に２回、あるいは３回だけという方達も数名います。好き勝手に休むようなことをせず、定期的にきちんと参加出来る方であれば、図書サービスに限らず他の分野のボランティア活動においても、参加していただくという方針を採用しています。（ちなみにがんセンター中央病院では現在図書の貸し出しだけでなく受付案内とお見舞いのお花の世話をボランティア活動として実施しています。ゆくゆくはベッドサイド・ケアや新聞の配達なども実施したいと願っております。）

病棟巡回の時間は午後１時からで、通常４時半前後に終了という段取りになっています。巡回する前に各階のナース・ステーションに挨拶して「ただいまから図書のボランティアの方が回りますのでご利用下さい」という放送をしてから巡回を始めます。

自分でお歩きになれる方は廊下を巡回しているワゴンのところまで出て来られ、読みたい本を探し、貸し出しを頼まれます。ベッドを離れることの無理な方には、ご希望をうかがってお届けしたり、ワゴ

ンをベッドの側まで他の方のご迷惑にならないように気をつけて運んだりしています。

患者さんのご希望の本がワゴンに積まれていない時は書庫まで探しに行き、書庫にもない時は同じ作者の本とか似たような内容のものを探して持っていくということもしばしばで出来るだけ患者さんがその時に読みたいと思われたものをお届けするよう最善をつくしています。どうしても間に合わない時は来週まで待っていただくというような配慮もしています。

貸し出しされる本の数は、水曜と木曜の２日で平均３５０冊～５００冊ぐらいです。どのジャンルの本がどれだけ貸し出されるかということまでは、はっきりと把握していませんが、漫画とミステリーは人気があって毎週必ずかなりの数が貸し出されていますからこの２つのジャンルは貸し出しのベスト５の筆頭に位置していると言えるでしょう。お料理の本も人気があって借りる方が多く、病気がなおったらこんなもの、あんなものを食べようと思っていらっしゃるのだろう、と推測しています。闘病記も人気がありますが、「がんの百科」などの医学書をリクエストされる方も少なからずいらして、患者さんの旺盛な知識欲に刺激を受けることもしばしばです。がんセンター中央病院では「がん」の告知率が非常に高くて90%以上の患者さんに病名が告知されている、ということを先日朝日カルチャーセンターの講義で教えられましたが、この高い告知率と、多くの患者さんが御自分の病気をよりよく知りたいという願望を持って「医学」という専門知識に興味を抱くという現象は決して無関係ではなく、「がん」という病気に対するこのような取り組み方は「告知」という試みが殆どなされていなかった頃には考えられなかった先端的な行動のパターンを示していると思います。患者さんが医学書に興味を示すということ一つをとりあげてみても、私達ボランティアは、活動を通して「がん」という病気との取り組み方について真剣に考える貴重な機会を与えていただいているような気がしております。「がん」に対する取り組み方というようなことだけではなく、本を媒介として患者さんと交わす会話の中で、私達は患者さん達から多くのことを教えられ、お互いに励まされ、慰められ、やすらぎを与えられることが多いことを常に感じています。

悩みの種は、多くの方が読みたいと思われているような本がなかなか返却されなかったり、返却されずにそのまま紛失してしまうことがしばしばあることで、少ない予算の中で新しい本を購入している私達にとっては大変残念な出来事ですが、公共の図書館のように住所、電話番号などは伺わずお名前だけを聞いて本を貸し出しているので、借りた方が病院からいなくなってしまった場合は取り戻すてだてがありません。返却に関しては２年ほど前にダンボールに千代紙をはった手製の返却箱を各階のナース・ステーションに置くようになってから状況が随分改善されましたが、返却率１００%というにはほど遠い状態です。「少ない予算」と書きましたが、私達は「図書の購入費」という名目では「がんセンター

中央病院」から予算は一切頂いておりません。病院からは登録に必要な文房具の購入費をいただいているだけで、一般の方から寄付していただいた本の中で、病院図書としては適当でないと思われる難解な哲学書などを古本屋さんに売って、その代金で新しい本を細々と購入しているというのが、偽らざる現状です。

病院サイドのボランティア活動に対する理解がもう少し深まって、多額ではなくてもよいから「図書購入費」という名目で予算が計上されることを心から願っています。また「がんセンター中央病院」では、来年(1999年)に１３階建ての新病棟が落成しますので、この機会に患者さんが図書を閲覧できる図書室の開設を希望していますが、実現できるかどうか、今のところ不明です。「病院サイドと協力してボランティア活動を拡充する」ということが今のところ私達に課せられた最大の課題であるという認識を持って、作戦を練っているところです。貸し出しの日を楽しみに待っていて下さる患者さんのために、より充実した図書サービスの実現をめざして、努力をしていきたいと思っております。

ブックレビュー

「天にかかる石橋」

文　まつだゆきひさ　　絵　くろだやすこ

石風社　１２００＋税

患者さんの求める本は実にさまざまです。一般病棟にいる子どもたちに児童書（絵本、よみもの）をブックトラックに積んで巡回していると、意外に大人が手にすることが多く、特に絵本は人気があります。一般的に絵本は子どもの本と思われがちですが、内容によって対象年齢がさまざまです。

ここに紹介する「天にかかる石橋」は病気で闘っている大人の人に読んでいただきたい一冊です。‥‥ずうっとずうっとむかし。石橋がかけられ、子どもたちはそこであそび、町の人々のなくてならないものでしたが、日が経つにつれて石橋は無用なものとなり、新しい橋が架けられることとなりました。‥‥石橋は思います。「こんど生まれてくるなら天の川にかかる橋になりたい」。絵を描かれた黒田さんはガンにおかされながらも病院の子どもたちに絵本を制作し、最後の作品でした。

文を書かれた松田氏は医師であり、二人三脚でこれまでも何冊か作品を残しています。また、黒田さんは「病気にならなければ絵本を描くこともなかった」と笑顔で語っていたそうです。病気をマイナスととらえずに前向きに生きた姿は、患者さんにとっても、健康な私たちにも励みとなることでしょう。

なお、この絵本の出版には、「知りたがりやのがん患者」の著者である種村エイ子氏が協力されています。

（浦安市立中央図書館　小林 順子）

［報告２］

ベッドサイドでの読み聞かせを通して

東邦大学医学部付属大森病院
ボランティア　ぐりぐら会
秋成 靖

１．はじめに

『入院している子供たちに喜んでもらえたら』という思いから、この会は始まった。

絵本の読み聞かせを通して、子供たちやその家族にとって少しでも心の支えになれたらという気持ちを小児科の先生に話しかけた。先生の配慮で小児病棟の婦長さんたちに話を通していただき、注意事項などの打ち合わせをして、1989年３月、おはなし会としてスタートした。医学部図書館の司書二人での出発だった。

本年３月で１０年目を迎えた、私たちぐりぐら会の活動の現状報告です。

２．活動内容

毎週水曜日、面会時間が終わる午後７時に、子供たちの親御さんと入れ替わりに、私たち、ぐりぐら会のメンバーが病棟へ入り、各部屋を巡回する。

子供たちひとりずつに声をかけ、ベッドサイドでの絵本や紙芝居の読みきかせが始まる。

年齢によって内容を考慮して、就学前の低年齢の子供たちには人形を使っての手遊びをしたり、小学生から中学生（時に高校生）には手品やクイズなどをすることもある。

午後７時からのこの時間は、子供たちにとって非常に大切な時間。なぜならば、ナースから何も言われる事なくゲームボーイやテレビを思う存分楽しめる時間だからである。

子供たちへ一人ずつ声をかける。マンガやテレビを見ているのをやめて、また、ゲームを途中で止めてくれて、読み聞かせを始めることができる。時に「いいです（NO）」と断られることもある。しかし、声をかけた７割から８割にかけての子供たちに受け入れてもらえている。

３．メンバー構成

1989年にスタートしてから、医学生と共に活動していた時期が数年あった。会長に当時の医学生が就き、社会人のメンバーが副会長や庶務として運営を支えていた。学生たちには、自分達の学年から次の学年の後輩たちを引っ張り、育てていくという流れができていた。その当時の医学生が現在、小児科の

先生となり、ナースとなって働いている。思いを同じくして活動していた人達が小児科の中にいることは、私たちにとって活動しやすい環境であるといえる。

しかし現在、会の中に医学生は存在しない。大学内での先輩から後輩への太いパイプが存在していた頃は、医学生にとっての本業である勉強が忙しくなる時期まで、各学年２人から３人、年間を通して参加できるメンバーがいた。ところが、ボランティアに対する取り組み方の変化とも言うべきか、１～２回参加して入会はしたものの、なかなか定着できず活動が続かない学生が増えていった。それは社会的にボランティアが騒がれ始め『１日体験ボランティア』などというスタイルが出始めた頃、私どもぐりぐら会の学生離れも進んでいったと思われる。

活動を開始して１０年目に入った現在、水曜日のおはなし会は、３人の社会人のメンバーが交代で病院へと足を運んでいる。年間５０数回の水曜日を迎えるなか、毎回必ず１人ないし２人が病棟に集えるよう努力している。

４．問題点

★途中でストップ

７時から90分の私たちの活動時間は、子供たちの自由時間でもあるけれども、時に、先生やナースが治療のため病室に来られることがある。それがちょうど読み聞かせの途中だったとすると、おはなし会はそこで中断、あるいは中止ということになる。治療を最優先としているために、それは仕方のないことである。

しかし、たいがいの場合、先生やナースから「おはなし会が終わってからでいいですよ」と逆に気を使って頂いている。

★個室ではないために・・・

ほとんどの病室が３人から６人の部屋である。手術後、麻酔が醒めるか醒めないかで寝ている子供や、９時の就寝時間前でも少し早めのおやすみに入る子供もいる。そんな子供たちが寝ている横で読み聞かせを始める。当然、通常の声量で演じることは出来ない。

このような状況の中でも絵本・紙芝居のなかに入り込み、声をあげて喜ぶ子供の反応を無下（むげ）に押さえることは難しい。ストーリーと共に、演じ手側も気持ちを盛り上げて、という所を、逆に押さえて押さえて・・・ということは数多い。

５．選書で考えること

手術を目前に控えている子供に、数多いお話しの中から『おおかみと７匹のこやぎ』を選び、読み聞かせすることはないと思う。

おおかみと７匹のこやぎ
狼に食べられた子供たちを、母ヤギが狼の寝ている間におなかを切り裂いて子供たちを助けるシーン

血液の病気の治療のため頭髪が少なくなっている子供に、『まあちゃんのながいかみ』をかばんの中から見つけられ、違う理由をつけて他のものに変えてもらったこともある。

まあちゃんのながいかみ

おかっぱ頭のまあちゃんは、髪の長い友達との会話の中で、これから自分はとてつもなく髪を長く伸ばすことを、創造性豊かに語り出します。

◇橋の上から餌のついたおさげを垂らして魚釣りするシーン

◇牧場でロープ代わりにおさげを飛ばして牛を捕まえるなどシーン

（高楼方子・作 福音館書店 1989年）

一般的に子供たちが大好きなお話でも、時に入院中の患児さんにつらい思いを抱かせることがないかと考える。私たちが一人の患児さんの前に立った時、場面ごとに配慮するべき事はたくさんある。

6．病院との連絡会・報告会

現在の私たちぐりぐら会と病院との関わりかたとして、年に一度の連絡会・報告会の場を持っている。

ぐりぐら会の中には、『おはなし会』以外に別のメンバーによる『おえかき教室』がある。『おえかき教室』は月に一回の活動で、工作・切り絵でシール・カレンダー・カードなどを作っている。

ぐりぐら会のその二つの会が１年間の統計を持ち寄り、婦長さんたち、そしてナースの代表の方々の前で活動報告を行っている。

年に一回のこの場は、病院側・ボランティア側の互いの意見を交わす事の出来る、とても良い機会ととらえている。

（ぐりぐら会の統計は、次ページの『おはなし会の現状』をご覧下さい。）

7．活動を通して感じたこと・まとめ

活動している中で子供たちの様々な言葉に触れることがある。

「明日の手術、成功するかな・・・」

「家が遠いからお母さんは１週間に１回しかこれないんだ」

「私、退院できるのかな・・・」

その様な中で私たちの配慮すべきことは数多い。

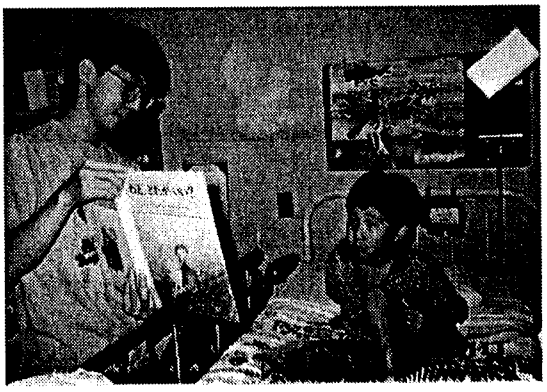
「ぐりぐら会また見たいから、もう一週間退院延ばしてもらうよ」

「大きくなったら僕も一緒にボランティアでぐりぐら会やるよ」

子供たちからこの様な声をかけられる度に、この会を存続させていこう、終わらせてはいけない、と考える。

患児さんにとって水曜日のこの時間帯は、入院中のほんの一瞬のことかもしれないが、体調・気分の

辛さを忘れさせ、楽しく元気になれるひとときを提供できるよう、メンバー一人一人が活動を続けている。



おはなし会の現状

1997年6月4日

ぐりぐら会（おはなし会）

活動日時　毎週水曜日午後7時から8時30分まで

活動内容　絵本・紙芝居の読み聞かせ・手遊び・手品・クイズなど

年間統計　昨年度（96年4月～97年3月）の統計です［人数は延べ人数］

実施回数	51回	
見てくれた子供たち	722人	（1回平均14人）
絵本・紙芝居の読み聞かせ	465冊	（1回平均　9冊）
手遊び・手品・クイズなど	506回	（1回平均10回）
ボランティア参加人数	116人	（1回平均　2人）

活動メモ

◇7時の活動時間から各部屋を巡回させて頂いています。

◇子供たちの希望や各部屋の状況などにより、プレイルームや食堂で読み聞かせをする場合もあります。

◇子供たちの年齢の違いや、入院期間の長さの違いなどにより、ボランティア1人に対しての子供たちの人数が、多人数であったり、時に少人数であったりします。

◇内容も各年齢を考慮したものを準備しています。また、長期入院の子供さんのためにも、新しい内容の発掘に努めています。

全国患者図書サービス連絡会会員名簿（1998.4.30）

（◎印は会長、○印は役員）

所属団体	代表者または氏名		
◎ 栃木県立がんセンター	小山 靖夫	320-0834 栃木県宇都宮市陽南4-9-13 栃木県立がんセンター	TEL 028-658-5151 FAX 028-658-5669
○ 東邦大学医学部附属大森病院 「ぐりぐら会」	石井 保志		TEL FAX
○ 病院図書館研究グループ	岡部 禹雄	400-0214 山梨県中巨摩郡白根町百々1834-4	TEL 0552-85-0405 FAX
○ 浦安市立中央図書館	小林 順子	279-0004 千葉県浦安市猫実1-2-1	TEL 0473-52-4646 FAX 0473-52-4659
○ 市立砺波総合病院 「オアシス文庫」	嶋 大二郎	939-1395 富山県砺波市新富町1-61 市立砺波総合病院小児科	TEL 0763-32-3320 FAX 0763-33-0274
○ 八戸赤十字病院 「ひまわり文庫」	滝沢 鷹太郎	039-1166 青森県八戸市根城5-2-16 滝沢小児科内科医院	TEL 0178-41-1178 FAX 0178-41-1178
○ 自治医科大学図書館 「日本患者図書館研究会」	奈良岡 功	329-0431 栃木県河内郡南河内町薬師寺3311-1 自治医科大学図書館	TEL 0285-44-2111 FAX 0285-44-8357
○ 京都南病院図書室	山室 真知子	600-8876 京都市下京区西七条南中野町8 京都南病院図書室	TEL 075-312-7388 FAX 075-315-4899
愛知県がんセンター研究振興会 「かのこ文庫」		464-0021 名古屋市千種区鹿子殿1-1 愛知県がんセンター図書室内	TEL 052-762-6111 FAX
高知県立中央病院ボランティア会		781-2122 高知県吾川郡伊野町天王北4-2-9 宮田由紀方	TEL 0888-91-6846 FAX
小郡市立図書館	赤川 芳春	838-0142 福岡県小郡市大板井136-1	TEL 0942-72-4319 FAX 0942-72-3501
世田谷ボランティア友の会 関東中央病院「欅文庫」	安土 裕	154-0011 東京都世田谷区上馬5-26-2	TEL 03-3429-4022 FAX
新潟県立がんセンター新潟病院 「あかね文庫」	有田 由美子	951-8133 新潟市川岸町2-15-33 新潟県立がんセンター新潟病院	TEL 025-266-5111 FAX 025-266-9385
聖隷三方原病院図書室	井指 喜代江	433-8558 静岡県浜松市三方原町3453	TEL 053-474-2222 FAX 053-475-7596
	石川 道子	110-0002 東京都台東区上野桜木1-10-19 日本医科大学看護専門学院図書室	TEL 03-3828-2194 FAX
	石澤 実枝	161-0033 東京都新宿区下落合3-15-17 エスポワール目白601号	TEL 03-3565-0944 FAX
東邦大学医学部付属大森病院 「ぐりぐら会」	牛沢 典子	144-0045 東京都大田区南六郷2-35-2-522 （牛沢方）	TEL 03-3762-4151 FAX
	小川 美穂	983-0005 仙台市宮城野区福室字高砂10 東北厚生年金病院医局秘書	TEL 022-259-1221 FAX 022-259-1232
	奥出 麻里	260-0842 千葉県千葉市中央区南町1-11-12 川鉄千葉病院図書室	TEL 043-261-5111 FAX 043-261-2305
八戸赤十字病院 「たんぽぽの会」	掛端 万似子	039-1104 八戸市田面木字上野平 八戸ウルス学院高校	TEL 0178-27-2245 FAX
	加藤 竜治	270-1356 千葉県印西市小倉台1-3-1-305	TEL 0476-46-0957 FAX
	木下 久美子	506-0025 岐阜県高山市天満町三丁目11番地 高山赤十字病院図書室	TEL 0577-32-1111 FAX
	小林 是鋼	406-0041 山梨県東八代郡石和町東高橋133	TEL 0552-62-5003 FAX
	近藤 幸子	337-0965 埼玉県浦和市間宮552-8	TEL 048-878-6003 FAX
	佐々木 美紀子	606-0802 京都府京都市左京区下鴨宮崎町125-4	TEL 075-721-7522 FAX
神奈川県立がんセンター 移動図書グリーンライブラリー	椎野 惠子	241-0004 横浜市旭区中白根1-26-10	TEL 045-954-0236 FAX
埼玉県立小児医療センター 「カリヨン文庫」	篠塚 邦子	339-0077 埼玉県岩槻市馬込2100 埼玉県立小児医療センター	TEL 048-758-1811 FAX

川崎市立川崎病院図書室 篠原 寿美江	210-0013	川崎市川崎区新川通12-1	TEL 044-233-5521 FAX
下原 康子	285-0841	千葉県佐倉市下志津564-1 東邦大学佐倉病院図書室	TEL 043-462-8811 FAX
下山田 しづ子	165-0027	東京都中野区野方5-33-9	TEL 03-3338-5325 FAX
菅原 勲	297-0226	千葉県長生郡長柄町金谷186	TEL 0475-35-3367 FAX 0475-35-3367
須磨 倫子	153-0062	東京都目黒区三田1-11-7 厚生中央病院	TEL 03-3713-2141 FAX 03-3713-8636
高橋 あかね	167-0052	東京都杉並区南荻窪1-32-20	TEL 03-3564-0037 FAX
高増 哲也	236-0000	神奈川県横浜市金沢区高岡西5-20-21	TEL 045-772-8831 FAX
日本医科大学千葉専門学院 田中 博子	113-0022	東京都文京区千駄木4-10-14シティコート千駄木102	TEL 03-5685-0586 FAX
田中 正子	963-0201	福島県郡山市大槻町字天正坦11 針生ケ丘病院	TEL 0249-32-0201 FAX 0249-25-0166
田部井 香織	105-0003	港区西新橋3-25-8東京慈恵医会医科-大学情報センター図書館	TEL 03-3433-1111 FAX
日鋼記念病院 「健康情報ライブラリー」 地原 かおり	051-0005	北海道室蘭市新富町1-5-13 日鋼記念病院医学情報部	TEL 0143-24-7016 FAX 0143-24-1064
静岡県立こども病院 「わくわく文庫」 塚田 薫代	420-0953	静岡市漆山860	TEL 054-247-6251 FAX
浦安市立中央図書館 常世田 良	279-0004	千葉県浦安市猫実1-2-1	TEL 0473-52-4646 FAX 0473-52-4659
大阪府立母子保健総合医療センター図書室 徳田 雅子	594-1101	大阪府和泉市室堂町840	TEL 0725-56-1220 FAX
山形済生病院 「記念図書室」 西村 佳子	990-0818	山形県山形市沖町79-1 山形済生会病院図書室	TEL 0236-82-1111 FAX 0536-82-0123
平島 智子	305-0012	茨城県つくば市中根452	TEL 0298-57-2095 FAX
市立井田病院図書室 福留 祥子	211-0035	神奈川県川崎市中原区井田1272	TEL 044-766-2188 FAX
東京都養育院老人医療センター 「はっぴい文庫」 前田 みち	173-0015	東京都板橋区栄町35-2	TEL 03-3963-1141 FAX
青森市民病院 「すこやか文庫」 松井 美保子	030-0821	青森県青森市勝田1-14-20	TEL 0177-34-2171 FAX
聖路加看護大学図書館 松本 直子	104-0044	東京都中央区明石町10-1	TEL 03-3546-0770 FAX
水上 佳子	400-0015	山梨県甲府市大手1-2-11	TEL 0552-52-0960 FAX
神奈川こども医療センター 「池波文庫」 山口 文子	232-0066	神奈川県横浜市南区六ツ川2-138-4 神奈川こども医療センター図書室	TEL 045-711-2351 FAX
東札幌病院 ボランティアグループいずみ 山田 由香子	003-0003	札幌市白石区東札幌３条3-7-35	TEL 011-812-2311 FAX 011-823-9522
吉岡 寿子	810-0073	福岡県福岡市中央区舞鶴3-5-27	TEL 092-721-0831 FAX 092-714-3262
渡辺 勲	565-0083	大阪府豊中市新千里西町3-1C23-210	TEL 06-832-6348 FAX

●名簿記載の中で訂正、補足等がありましたら下記まで御連絡下さい。

全国患者図書サービス連絡会

(連絡先) 〒600-8876 京都市下京区西七条南中野町８
京都南病院図書室 気付　山室 眞知子
TEL　075-312-0726 (直通)
FAX　075-315-4899

編集後記

自分の勤める病院の話で恐縮ですが、年に二回ほど入院患者さんを主な対象（とは言え、誰でも入場可）とした「患者さんのためのオアシスコンサート」を開いています。病院コンサートは、最近方々の病院で増えつつあるサービスで、どのような内容で提供するかは千差万別です。私たちは、どちらかといえばクラシックな内容が中心ですが、ともかくも「確実な技術に裏打ちされた立派な演奏は患者さんの精神的活動を高める」という信念のもとに、プロまたはそれに準ずる力を持った人に出演をお願いしてきています。

今年三月は、神奈川県を中心に集まって活動しているタンゴの楽団「オルケスタ・ティピカ・スエニョス」の七名の方々を招きました。プロ･セミプロの現役を退いた平均年齢６２歳。細かいことを言えば、バイオリンなど弦楽器の音程の多少の狂いなど、加齢による衰えは見えるものの、その情熱にはただただ圧倒されるのみでした。アンコールを求める拍手がこれまでになく多かったのは、単に懐かしいタンゴの名曲への陶酔ばかりではなく、還暦を過ぎても一つのことに打ち込む姿が、高齢者が多い入院患者さんに訴えるものがあったからではないかと思っています。今後の企画の上で、いろいろ考えさせられるものがありました。

蛇足ですが、今年６月19日は、ピアノとチェンバロの大家、小林道夫氏を招いての「ギターとチェンバロの夕べ」です。

さて、本号は2月14日に東京で開催された総会の議事報告に、当日行われた講演と事例報告を掲載しました。会員が、じわじわと、しかし確実に増えつつありますので、年度の初めにあたり最新の名簿も掲載しました。御活用下さい。

（D．S.）

全国患者図書サービス連絡会会報（季刊）

第５巻第１号（通巻13号）　1998年５月20日発行

発行　**全国患者図書サービス連絡会**

（連絡先）〒600-8876　京都市下京区西七条南中野町８

京都南病院図書室　気付　山室 眞知子

TEL　075-312-0726（直通）

FAX　075-315-4899

編集担当　**市立砺波総合病院図書室**

〒 939-1395　富山県砺波市新富町1-61

市立砺波総合病院小児科・図書室

嶋　大二郎

TEL　0763-32-3320　　FAX　0763-33-0274

年会費はなるべく振り込みにてお願いします

振込口座　　００１５０-４-３６０５２２

加入者名　　全国患者図書サービス連絡会

《年間購読料　非会員3000円》